

## 10の姿

2024. 5. 24

世界でもまれな複線型であり、複雑かつ一筋縄ではいかない日本の乳幼児教育界だが、幼稚園、保育所、認定こども園に共通して示されているものがある。それが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」である。これには、10の姿がある。小学校では、この10の姿を踏まえて、生活科の中で発揮させ、各教科の活動につなげていくスタートカリキュラムを策定し、接続を意識することになっている。

この10の姿とは、具体的にどういったものなのか。「発表会をしよう」で考えてみる。ここでは、どんな発表内容にするかの話し合いを行う。10の姿のうち、「⑨言葉による伝え合い」が大きく関わってくる。相手の話の内容を注意して聞いてわかったり、自分の思いや考えなどを相手にわかるように話したりする。言葉を通して教職員や友達と心を通わせる。これらが、育ってほしい姿となる。

「お寿司屋さんごっこ」で考えてみる。ここでは、「③協同性」が関わってくる。いろいろな友達と積極的にかかわり、友達の思いや考えなどを感じながら行動する。相手にわかるように伝えたり、相手の気持ちを察して自分の思いを出し方を考えたり、我慢したり、気持ちを切り替えたりしながら、わかり合う。いろいろな活動や遊びにおいて自分の力で最後までやり遂げ、満足感や達成感をもつ。クラスみんなで共通の目的をもって話し合ったり、役割を分担したりして、実現に向けて力を発揮し、やり遂げる。これらが、小学校入学までに育ってほしい姿である。

こうしてみると、ごっこ遊びがいかに大切かがわかってくる。どれもレベルが高い。基本的には、大人にも通用するものである。いずれも、幼児期に育みたい重要な基礎である。

10の姿の中には、「⑥思考力の芽生え」というものもある。「いろいろな種をしぼろう」で考える。物との多様なかかわりの中で、物の性質や仕組みについて考えたり、気付いたりする。身近な物や用具などの特性や仕組みを生かしたり、いろいろな予想をしたりし、楽しみながら工夫して使う。これらが、育ってほしい姿となる。

幼稚園にしる、保育所にしる、保育を担当する先生方が、10の姿をどのくらい意識しながら、子どもたちに関わることができるか。このことが重要である。子どもたちが、小学校に入学するまでに何ができるか。どんなことをするべきなのか。その指針、方向性となるのが、10の姿である。

ある言葉が浮かんできた。「人生に必要な知恵は、すべて幼稚園の砂場で学んだ」ロバート・フルガムの言葉である。幼稚園に勤務するようになり、この言葉が、今まで以上に真実味を帯びてきている。